

## 〈シンポジューム〉

# 中浦幌駅通所と中川北松（V）

博物館報告編集局・編

山崎徹 お母さんという方は本当に昔気質の台所でじっと仕事ばかりしているような方だったんですね。

中川シズ そして、お寺へ参るのに私もちよいちよいついて歩きましたけど、「さああんた方、今日はどこそこのお参りじゃから早うしもうて参りなさいよ。」と声をかけて歩くの。そういう人だったね。

山崎徹 女中さんというのは駅通で使ってなかつたですか。

中川シズ やはり、ポツポツいました。私の代はずっと女中さんいました。その前は私が主にお母さんと2人でやりました。妹が高等科へあがるとか、皆学校。私は小学校しか行かないですからね。一生懸命やりました。その時の夢は今でもみます。なんば、こびりついているものですかね。

中川政雄 とにかくお客様が、そんなに忙しいほどないんだもの。

中川シズ そうでもないよ。

中川政雄 滞在する人が測量士とかと材木屋とかそんなのがある位で普通のお客なんて、俺のいる頃なんて1ヶ月に5~6人だった。

中川シズ 学校の研究会なんて先生方20数人も集まりました。

山崎徹 留真ですか？ 留真の何という小学校。

中川シズ 留真小学校じゃないかしら。私の出たのはもうマッチ箱みたいな橋の向うにどっかの倉庫みたいなところで。鵜川先生、園田先生。

中川政雄 簡易教育所。

山崎徹 何年間でした。

中川シズ 6年やつとこでました。

山崎徹 明治は4年生で大正になったんですね。

中川シズ そうね。5年生の時でないかな。明治天皇がおかくれになったの。

中川政雄 そうだ。

山崎徹 中川さんが41年に熊谷農場からこちらの方に来てから駅通の手伝いをしたということはありますか。実際に父親代りになったり時にはお客様に馬を出してやったりということは。

中川政雄 ありますよ。やりました。

中川シズ その手入れは兄さん馬好きでしたものね。草刈りはしなかったけれど。

中川政雄 草刈りもやったさ。

中川シズ なんか私らはこわいめにあってね。

中川政雄 草刈りは俺は本当にやったよ。草刈りしなかったら盆も正月も休めなかったから。

中川シズ 子供がしょってくる位しれているから。それでも毎日学校帰りに。そしたら園田先生が出て来てね、「ああ、こんな小さな子が草刈るの。」ってあの先生と奥さんが荷作りしてくれたことがありました。

山崎徹 人を乗せて上・下に出かけたことありました。

中川政雄 ありました。

山崎徹 それはもちろん冬ではないですね。

中川政雄 いや、冬もありました。

山崎徹 雪を踏んでですか。

中川政雄 ええ。

山崎徹 その時には自分は歩くのですか。

中川政雄 そうです。いや、私は馬で。

### 目 次

|                         |            |    |
|-------------------------|------------|----|
| 年頭所感                    | 野沢貞男       | 1  |
| 〈シンポジューム〉中浦幌駅通所と中川北松（V） | 博物館報告編集局・編 | 2  |
| 浦幌町に於ける蝶類の分布            | 松本尚志       | 6  |
| 浦幌新吉野台細石器遺跡出土の遺物        | 後藤秀彦・佐藤訓敏  | 15 |

表紙写真：アオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark の幼鳥。於 吉野湿原

山崎徹 2頭だけですか。

中川政雄 2頭で行って帰りに1頭引っぱって来るんです。

中川シズ それからだんだん馬轡ということになってきてね。

山崎徹 馬轡で運ぶということは。

中川政雄 そういうこともありました。

山崎徹 馬轡というのはもちろん雪ですわね。そうすると上・下かみ・しもへ行くのに馬轡の中のお客さんに暖房なしでしょう。

中川政雄 いや、湯タンポ。

山崎徹 デコデコのある湯タンポ。

中川シズ ええ。そしておふとんをかけてね。ひっくりかえしたら最後。

中川政雄 火鉢はひっくりかえるから恐いし。

山崎徹 雪の降る日なんか行ったことがありますか。

中川政雄 ありますよ。

山崎徹 そしたらもう目的地に着く頃は真白ですね。乗っているお客様も。かくまきなんていうのは。

中川政雄 ああ、あった。あった。

中川シズ かくまきに、男の人は二重にして、本当に思いやられるね。

中川政雄 だけどここに50戸いたし、これから浦幌までの間ズーッと道路ぶちは草あったし、立派な道あった。今のような立派な道でないだけで。でこぼこだけれども。

山崎徹 今の道はこの道ですね。この道は昔の駅通りだったのですか。

中川政雄 そうです。ほとんどかわってないです。

山崎徹 川筋を行くなんてことではなかったんですね。

中川政雄 あったんですよ。それは歩のとこがここへ来る前ですよ。

山崎徹 と言うことは即ち駅通りの前のアイヌが歩いたような道ですね。

中川政雄 そうです。ここに開拓に入った明治30年、34~5年頃迄は道路というものがないものだから川筋を歩いたんです。

山崎徹 これはあとで役場で調べれば判ると思いますが先刻のそのタコを入れてこの道路を作ったというのは明治40何年位になるんでしょうか。

中川政雄 いや、それは40何年できかない。大正ですよ。

山崎徹 駅通りの馬が行ったり来たりした道は馬や人間が歩いてやっとできた道ですね。

中川政雄 それは村道ですよ。

中川シズ 村道であったのがこれ国道になったの。

中川政雄 いや道々だ。今でも道々だけれども、そんな、人が踏んでつけた道ではないんだ。村道です。浦幌村というものの生剛村というものができて、どの村長だか知らないけれども上浦幌から本別へ抜けるだけの道路はやっぱりつけたんですよ。山崎徹 その工事がまたおそらく大変だったことだったと思うんですがね。その頃のタコを使ったとか何だとかというのは知らない訳ですね。

中川政雄 知らないこともないんだけれど、私はかすかに憶えているんだが、あっちこっちにタコ部屋はあったですよ。だけどそれは今の道路の半分も幅ないからね。そしてバスを入れるわけでもないし雨降ったらそれこそもう深い穴になった所ばかりで。私のところの空馬車なんか米1俵つけて浦幌から上がってくるのにようやくのところなんかあったもの。

山崎徹 馬車で。ぬかっちゃって。

中川政雄 ええ。

中川シズ それ前は「段付け」ばかりね。

中川政雄 段付けも俺やったもの。

山崎徹 段付け。駄鞍。

中川政雄 ええ、馬の駄鞍に米2俵、そして中に乗って。

中川シズ 私はその真中に乗せられて2才の時から浅利治助さんに連れてもらって守りしてもらった。それも憶えている。

山崎徹 中川さんがそういう手伝いを、実際に駅通りの仕事に担わった頃ですね、非常なぬかるみを歩いた中で一番ひどい場所は今のどの辺ですか。

中川政雄 浦幌から5km位来たところに通称千間道路という真直ぐな道路があるんですよ。あの鉄道からこっちに向って別れてこっちに向って来るところにね。そこはひどかった。

山崎徹 どんなふうにひどかったのでしょうか。

中川政雄 それが谷地、湿地帯に道路をつけたんです。バスを入れてないし、それこそ馬車に乗っていても振り落される位ひどい所。

中川シズ 年中ぐちゃ、ぐちゃだったわね。

中川政雄 米1俵、俺のところの馬で米1俵でようやくのことがあった。

山崎徹 あるところで、道が悪くて草を刈って道に敷いてやっと馬を歩かして來たという、そういう話を聞きました。馬車が最初に駅通で使ったのはいつですか。

中川政雄 もう、明治の終りですね。

山崎徹 その頃は冬は馬橇を使いましたか。

中川政雄 ええ、そうです。

山崎徹 明治末年ですね。

中川政雄 馬橇はちょっと早かった。私こちらへ移って来る時は馬橇で來たんですから。41年ですね、42年かな。

山崎徹 馬車の輪ですね。もちろん鉄なんかぜんぜん使っていない。

中川政雄 いや、鉄輪だけど、鉄輪が幅の狭い鉄輪なんです。

山崎徹 それは何と言いました。

中川政雄 やっぱり「金輪」ですよ。金輪と言いました。それから今度幅広くなつたんです。

山崎徹 細いというのは寸で言ってどの位でしょう。

中川政雄 2寸位だろうか。

山崎徹 そうすると6cm 6mm位ですね。昔のワンヨウポンプ位ですね。

中川政雄 そうそう。あれ位なもんだ。あれよりちょっと広い位のものだ。

山崎徹 そして、心棒は。

中川政雄 心棒はカネです。

山崎徹 隨分モダンですね。所謂る木の心棒なんて時代はなかったんですか。

中川政雄 あったかもしれないけれど、それは知らないです。この辺は道が悪いから馬車よりも面倒くさい駄送ですね。駄鞍に荷物積んで歩いたんですねわ。

田中私 鞍付けは大正13年頃まだやっていました。

山崎徹 中川さんが、上・下にそれぞれ例えれば2頭の馬で、1頭の馬がお客様を乗せて1頭に自分が乗って行って上浦幌なら上浦幌に着いてお客様を置くわけですね。その時に引き継ぎなんかはどういうふうにしたんですか。

中川政雄 何にもないです。書類の交換も何もないです。

山崎徹 お金なんかはもちろん払って行くんですね。

中川政雄 先払いだね。

山崎徹 そうでしょうね。受け取ったということはないですね。

中川政雄 私はないね。

山崎徹 駅通ですから人間だけじゃなくて時には非常に重要な書類も、郵便局の代りなんかもしたんじゃないのかと思うのですが、そういうのはどうでしょう。

中川政雄 ないね。

山崎徹 やっぱり人間を泊めて人間を運んだということだけで書類のあればなし。

中川政雄 ないです。

山崎徹 そうすると明治の時代に手紙が往った来たというのは誰がやったんですか。

中川政雄 郵便局の配達ですね。

山崎徹 その頃この辺に郵便局ありましたか。

中川政雄 ないです。浦幌からここまで。

山崎徹 郵便さんは何で來たんですか。

中川政雄 郵便さんはやはり歩いてですね。馬に乗って歩いた郵便さんもいますけれど自分の馬ですね。

山崎徹 郵便さんが駅通を使うということは…。

中川政雄 ないです。

山崎徹 本当の駅通の「通」という字は、昔郵政省のことを通信省といいましたがあの「通」なんです。そういうその郵便業務をやった所がけっこうあるわけです。

中川政雄 やらない。

山崎徹 そうでしょうね。もしかすると、明治30・40年頃にできたとすればその頃は鉄道も走っていますし、浦幌には立派な郵便局もできていますしね。下浦幌の郵便さんが遠々と往ったり来たりして……。

中川政雄 ここで取り継ぎをしたです。取り継ぎということは浦幌からここまで持つて来る。マア通送みたいなものです。ここで浦幌は上方へ行ぐのに引き渡しして、取継です。。郵便物の取締所です。そしてあの赤い郵便箱ぶら下げてあったんです。

山崎徹 それです。それならもう立派に郵便局の前身になっているんですね。赤いのぶら下げてあったんですね。

中川政雄 赤いのこんな四角いのね。

山崎徹 誠におもしろいのですけれど、今郵便局で売り出しているあれに近いですね。

中川政雄 あれより大きいのね。

山崎徹 少し大きいですね。「元」の字のついた。

中川政雄 ええ。

山崎徹 局の仕事はしていないけれど通送はやっているんですね。

中川シズ 父は通送もやったからね。

山崎徹 その頃内地の福井から中川さんのお宅に手紙が来るというのにその日付けを見るとどの位かかって来ています。

中川政雄 それは記憶ないけれど大分かかるってない。

山崎徹 中川さんは福井には行きました。

中川政雄 2回行ったことがあります。

山崎徹 北松さんの田舎にですか。

中川政雄 はい。

山崎徹 お寺か何かのことですか。

中川政雄 そうです。父が、終戦後でしたけれども「内地の寺に墓を置いてあるんだけれども、お前行ってその墓を寺からもらって送ってよこせ。」と言ふんでそれで行ったことあるんです。

山崎徹 そうすると今、中川さんの関係の墓は全部こちらですか。

中川政雄 そうです。浦幌の市街の浄福寺にあります。それはここで作ったんでなく内地から持つて来た墓です。

山崎徹 それを中川さんが持つてこられたんですね。

中川政雄 いつですか。それは。

中川政雄 昭和21年ですね。

山崎徹 終戦の翌年。ひどい年ですね。

中川政雄 ええ。ちょうど福井県に大地震のあつた年ですよ。確か21年か22年だと思うんですけどね。ちょうどこわして荷造りをして石を全部コモに巻いて縄かけて貨車に積んだっていう電報が入った。私は頼んでおいて帰って来たんだけれども電報が入ってその貨車が出たか出ないかという時に大地震さね。だから、こりや失敗したな、墓はもう来ないなと思っていたら、頼んだ人から無事送り出したという、だからあのちょうど出た後地震だったんですね。

山崎徹 北松さんはどこで亡くなられました。

中川政雄 時和で亡くなった。

山崎徹 昭和ですか。

中川政雄 はい、昭和25年です。

山崎徹 お母さんの方は。

中川政雄 昭和35年。

山崎徹 やはり、時和。

中川政雄 いいえ、それは吉野です。私の今居るところです。

山崎徹 当時何才だったんでしょう。

中川政雄 父は83才、母は82才です。

山崎徹 お2人とも浄福寺ですね。

中川政雄 はい。

山崎徹 これはもう本当に明治一代記ですね。

中川政雄 紀元2600年にうちの親父は天皇陛下の今園遊会ですか、あれに紹介されて。その頃は家内同伴ということはなかったようですね。あつたかもしらないが婆さんつれて行く気はなかったんだな。

山崎徹 開拓功労者として。

中川政雄 はい。

中川シズ あったんだろうけどね。つれて行かなかったのかもしれない。

山崎徹 そうですか。高松さん、浦幌の開拓功労者の中で人望があり名声もはくした方というのはこの方ですか。

中川政雄 それは私から言うのはばかるけれどもまちがいなくうちの親父だ。それは50年の記念式典に第1号に表彰されているんだ。

山崎徹 それは町史に載っていますね。

中川政雄 今度の新しいのに載っているでしょうね。

山崎徹 駅逓取扱人、総代人、村会議員。

中川政雄 馬匹改良組合長、マアやつたやつた。とにかく家にいないんだから、家にいる暇ないんだから。十勝の畜産組合の副会長、会長もやつたし。

山崎徹 これだけ色々中川北松さん並びにご家族の方々の駅逓にかかわりのあることを聞きましたら、この駅逓というものは建てられた年度もこつちは明治36年4月29日になっているんですけどれども、お二人の記憶では40年・41年というんですけどれども、非常に明治の建物としては柵屋根で貴重なんです。今も常室の橋渡った時に右手の方に2軒ばかり非常に古い家がありましたね。今、護岸工事やっている少し先です。

高松孝行 空家になっているところね。高木さんの向い。

中川政雄 土本さんのいた家でないか。

高松孝行 ええ、道路ぶちでしょう。

山崎徹 あの方、あの辺はやはり福井でしょうね。建て方を見ると茅ぶきのふき方で一辺に判ります。

中川政雄 あの方福井だったね。

山崎徹 これは古い家だな。富山の越中だな、越前だな、これは相馬の建て方だな、二宮なんか行くとあれは福島県だという建て方。

中川政雄 いや実際先生、調べているねえ。

山崎徹 こっちにはまだ2~3回位しか来たことがないんですけど、そんなところからしか見て歩かないものだから。

中川政雄 この浦幌はね、福井県・岐阜県・富山县・石川県、それから遅く福島県が入っている。この5県はもう皆団体で入っています。

山崎徹 今、中川さんが言われたように北海道に一番近いのは東北なのにどうして比較的遅いのですか。

中川政雄 海岸の漁師には東北の者がいたんですけど。

山崎徹 内陸は遅いんですか、入って来るの。

中川政雄 そうです。

山崎徹 案外四国がけっこう多いんですね。阿波の人、土佐の人、高知県とか愛媛ですね。越前衆というのは相当の縄張りをもっていますね。北海道に門徒が多いというのはそういうことなんですね。

中川政雄 活平へ広島団体が入った。

中川シズ 朝日農場も広島だったわね。

山崎徹 理由がありまして、徳島と広島。あの辺の農家は藍を作っていたんです。その藍の栽培が特に日露戦争の後になってから染料が輸入されまして、所謂る日本独自の藍という植物染料が全くダメになったんです。そういうことで、藍作物を田に転換できないものだから誘いによって、すぐ北海道に来た方が広島・徳島に多いんです。ただ私、中川さんの場合にむこうでは長男の方だと聞いて、普通、家族の中で次男の方の方が多い場合もあるんです。それから明治30年代にも大洪水があって随分あの辺がひどくなったりあります。

(次号につづく)

## 浦幌町に於ける蝶類の分布

松 本 尚 志

(1)

日本産蝶類の分布については、かなり綿密な調査研究が進められ、新種の発見は不可能に近いと信じられてきた。事実1955年に、愛媛県松山市皿ヶ嶺で、ベニモンカラスシジミが発見されてこのかた、十数年新種発見の報告はなかった。<sup>註1</sup>

ところが1974年にいたり、2つの新種の発見が報じられ人々を驚せた。日高アポイ岳におけるヒメチャマダラセセリ、熊本県市房山のゴイシツバメシジミの発見がそれであった。そのいずれもが極めて限られた地域にのみに生息していたために今日まで発見されることがなかったのであろう。

蝶についての調査研究は、分布ばかりではなくその生態・食性・種の分化などにまで範囲が及び極めて微細なことがらにわたる研究も数多い。

とはいっても、不明な点もかなり多く、分布についても、地域毎の研究で残された部分も多い。

浦幌町に於ける分布の調査・研究も、阿部宏氏円子紳一氏など幾人かの人々が手がけられている。私の調査記録もこれらの人々の努力に負うところが多い。近年自然環境の破壊がすすみ、そのため絶滅の危機に瀕している種も伝えられている。このような事情からも、調査とその対策がいそがれている。とりあえず、浦幌町での調査記録と近接町村の記録を比較してみたいと思う。

(2)

北海道における蝶類の分布は、石狩低地帯と黒松内低地帯が、その境界として知られている。たとえば、ヒメカラフトヒヨウモン(ホソバヒヨウ)